

ラウル・デュフィ展 絵画とテキスタイル・デザイン

パナソニック汐留美術館（新橋） 2019.10.05～12.15



「ラウル・デュフィ」
(1877～1953) は、19世紀末から20世紀後半に活躍したフランス人の画家で、“色彩の魔術師”と称されている近代画家である。

画伯の画風の陽気な透明感のある色彩とリズム感のある線描の油絵と水彩画は、画面から音楽が聞こえてくるような感覚をもたらして、音楽や海、馬や薔薇をモチーフとしてヨットのシーンや音楽のイベントなどの作品を数多く描いている。

《ニースの窓辺》 1928年頃 油彩/カンヴァス (上図)

画伯の代表作の一つで、南仏の心地よい潮風を受けながら開け放たれた窓から見える光景は、ニース湾に面して大きく開けていて椰子の木が並ぶ海辺の景色が大胆で、青・赤・緑・黄で塗りつくされた色に活気と流動性のある巧みな線で装飾的センスを発揮している。

<展覧会の構成>

第1章. 絵画 生きる喜び 陽光 海、そして音楽。

第2章. モードとの出会い。第3章. 花々と昆虫。第4章. モダニティ。

<展覧会の見どころ>

画伯は、喜びの画家とされて、身近な上流社会一競馬とヨットの情景、リヴェラの光輝に満ちた眺望、パーティと音楽会一などを描いた作品が多い。

1. 初期から晩年までの優れた代表的作例《花束》など「16点」が出品。
2. テキスタイル・デザイン関連作品と資料多数が出品。
3. デザインのテキスタイルを使用した衣装作品「20点」が出品。



《花束》



《夏 (デザイン風景)》



《ヴァイオリン》